

漫筆餘瀝

△内務省の決定案と 多の犠牲を拂つて五萬圓の 小名濱築港工事費に...

業餘吟

○富田青波の死に於ける哀れに思ひ至りて心に ぞ必す

○大島に死にしろ若き女を思はむか例へば 死に直面してせし接吻のことも

○おのれたちのみ解る歌作りよるこびある人等 に何をか云はむ

○おびたしき新年應募の歌見つゝはとほとわ れは疲れぬ

○藤茂吉のげげしく見つゝ吾は安心して 歌を作らむか

○努力して得られざるは困窮あるのみ (アラト)

新年懸賞歌募集

一、題 水、雪 二、縮切 十一月二十五日 三、發表 一月一日磐城新聞紙上

四、選者 小山田 滋 五、賞品 一等(置時計)一名 二等(本紙三ヶ月購読券)二名

三、賞品 一等(置時計)一名 二等(本紙三ヶ月購読券)二名 三等(本紙メダル)三名

四、選者 小山田 滋 五、賞品 一等(置時計)一名 二等(本紙三ヶ月購読券)二名

三、賞品 一等(置時計)一名 二等(本紙三ヶ月購読券)二名 三等(本紙メダル)三名

四、選者 小山田 滋 五、賞品 一等(置時計)一名 二等(本紙三ヶ月購読券)二名

三、賞品 一等(置時計)一名 二等(本紙三ヶ月購読券)二名 三等(本紙メダル)三名

拈華微笑

高橋枝だつた、 武士君調へら、 防波堤から歸り 出た小名濱築港

疑獄の大浪 砂利食ひのおせ うばんをした齒 呼、何と騒がし

矢張り食つての 熱い瞳と瞳の輝き 對照した鳴子の遠い彼方には杜が

赤い戀の私語 それは童話の國の様な挿 話 其處には近代化學の世の

見悪い血と肉の競争 虚偽、虚飾の呪はしき社 會より脱したる

清浄なる神の住居の如き 春の女神の様な和やかなる 男女の愛情

それは十年の昔 されど、今は三人の母 だが昔の想出は錆びつい

社會の今日

△閣院官殿下参謀總長御 就任△第六十議會召集

△内務省主務部で各府 縣學務部長廢止中止に決 定△魚、野類等類々騰

△昭和六 地の涯ての出来事迄も 聞き流す、まいと抹消

神経を光らさず各冬木、 葦すきとなりて日當る 椋先の、牡丹の冬芽皮

をかむれり 島木 赤彦

お蘭陀お蝶 (214) 渡邊歌碑作 布施長春書

眺望のよい所だつた、青 々と繁つた夏草は笠を伏せ

お蘭陀お蝶

眺望のよい所だつた、青 々と繁つた夏草は笠を伏せ

たやうな邸をついで、雲 の床の夢にうつりて、

その下を柔かな野風が 吹く。その外名の知

れぬ花が重たい顔をよつ て、袴の上にはた〜と酒好

い加減な挨拶をして居ら ぬかのやう、裾の方から曳

詰めてはにや〜と笑つて、 殊に、ソレ彼所に咲いて

は、ハ、ア、左様であつたか ぞ人も聞ひける山里は、花

修理事務部新設

記念◎二割引特賣 期間...十二月十五日ヨリ一月十五日マデ

伸好堂選セントラル萬年筆 標準型...一、五〇〇銭ヨリ

御買求めに絶好のチャンス 豊富なお品より御氣に召す

御選定を...! 才植小路 伸好堂書店

電話(呼)五三八番

吉田眼科病院 平町紺屋町

移轉御披露 各位益々御清邁奉賀候、 今回御買様の御勧めにより三好家

金銀高價買入

平町二丁目(三幸堂跡) 質札は金時計、指輪類(有利に御相談致します)

根本時計店 電話六〇七番

移轉御披露 各位益々御清邁奉賀候、 今回御買様の御勧めにより三好家

向の新築家屋に移轉致し清潔と勉強 をモットーとして營業致候間書に倍

し御引立を仰ぎ度奉懇願候也。 平町新田町廿六

料理店 壽遊亭主 電話三九一

吉田眼科病院 平町紺屋町

平素の御愛顧に酬ゆる謝恩奉仕大特價提供

歳末奉仕大賣出し 十一月二十一日 十一月二十二日

十一月二十三日 十一月二十四日 十一月二十五日

十一月二十六日 十一月二十七日 十一月二十八日

十一月二十九日 十一月三十日 十一月三十一日

十二月一日 十二月二日 十二月三日

十二月四日 十二月五日 十二月六日

十二月七日 十二月八日 十二月九日

歳末奉仕大賣出し

十一月二十一日 十一月二十二日 十一月二十三日

十一月二十四日 十一月二十五日 十一月二十六日

十一月二十七日 十一月二十八日 十一月二十九日

十一月三十日 十二月一日 十二月二日

十二月三日 十二月四日 十二月五日

十二月六日 十二月七日 十二月八日

十二月九日 十二月十日 十二月十一日

中野洋品店

より良くより安き 平町二丁目 電話五三番

吉田眼科病院 平町紺屋町

移轉御披露 各位益々御清邁奉賀候、 今回御買様の御勧めにより三好家

向の新築家屋に移轉致し清潔と勉強 をモットーとして營業致候間書に倍

し御引立を仰ぎ度奉懇願候也。 平町新田町廿六

料理店 壽遊亭主 電話三九一

吉田眼科病院 平町紺屋町

平

六六四電 館平

移轉御披露 各位益々御清邁奉賀候、 今回御買様の御勧めにより三好家

向の新築家屋に移轉致し清潔と勉強 をモットーとして營業致候間書に倍

し御引立を仰ぎ度奉懇願候也。 平町新田町廿六

料理店 壽遊亭主 電話三九一

吉田眼科病院 平町紺屋町

移轉御披露 各位益々御清邁奉賀候、 今回御買様の御勧めにより三好家

修港費の炭礦寄附問題

漸次具体化の域に進む

反對給付が可否の分岐點

研究の上來月中に回答

小名濱商港修築費に關する地元の諸問題に關し、炭礦寄附問題に關する研究は、漸次具体化の域に進む。反對給付が可否の分岐點となり、研究の上來月中に回答が得られるものと見られる。

中之作漁港位置調査

橋農林技師けふ現場へ

農林省水産局技師及び河を視察し、中之作漁港の位置調査が行われ、橋農林技師が現場へ赴き、調査を行った。

高木氏の取調へ

築港疑獄進展か

高木氏の取調が行われ、築港疑獄の進展が注目されている。高木氏は、築港の経緯について説明した。

恩賜品傳達

十五名の拜受者

恩賜品の傳達が行われ、十五名の拜受者が発表された。恩賜品は、地方振興に資するものである。

留守宅を慰問して

慰問の贈り物

留守宅を慰問する活動が行われ、贈り物が届けられた。留守宅の生活に支那が与えられる。

江名底曳陳情

代表者けふ出陣

江名底曳の陳情が行われ、代表者が出陣した。陳情の内容は、地域の発展に関するものである。

赤井嶽男記

警中人物記

赤井嶽男の経歴が紹介され、警中人物として知られるようになった。彼の活動は、地方の発展に貢献した。

五戸に喰ひ止む

原因は煙突の飛火

五戸に喰ひ止むという事件が発生し、原因は煙突の飛火と判明した。事件の詳細が報じられている。

十名一團の怪漢

深夜農銀支店に殺到

十名一團の怪漢が深夜農銀支店に殺到し、事件が発生した。事件の経緯が詳しく報じられている。

現金取扱延長

年末の平郵便局

現金取扱の延長が行われ、年末の平郵便局が実施される。これは、市民の利便を図るためである。

年向ふ鉢巻で

葉書を泳ぐ

年向ふ鉢巻で葉書を泳ぐという活動が行われ、市民の参加が盛んだ。これは、地域の活性化を図るためである。

平窪免租地

九十二町歩へ指令

平窪免租地の九十二町歩へ指令が出された。これは、地方の発展を促進するためである。

現金取扱延長

年末の平郵便局

現金取扱の延長が行われ、年末の平郵便局が実施される。これは、市民の利便を図るためである。

十名一團の怪漢

深夜農銀支店に殺到

十名一團の怪漢が深夜農銀支店に殺到し、事件が発生した。事件の経緯が詳しく報じられている。

錯亂女房の入水自殺

三日目に浮び上る

錯亂女房の入水自殺事件が発生し、三日目に浮び上った。事件の経緯が詳しく報じられている。

警署署の傳書場

警中へ住み替へ

警署署の傳書場が警中へ住み替へされた。これは、業務の効率化を図るためである。

五倍の増加

平局の年賀洪水

五倍の増加が見られる平局の年賀洪水が報告された。これは、市民の参加が盛んだったためである。

横領の元木炭検査員

白土時雄宅に中逃走

横領の元木炭検査員が白土時雄宅に中逃走した。事件の経緯が詳しく報じられている。

警署署の傳書場

警中へ住み替へ

警署署の傳書場が警中へ住み替へされた。これは、業務の効率化を図るためである。

至誠寮の謀議

一方寄居生と相呼應して

至誠寮の謀議が行われ、一方寄居生と相呼應して進められた。これは、寮の発展を促進するためである。

警署署の傳書場

警中へ住み替へ

警署署の傳書場が警中へ住み替へされた。これは、業務の効率化を図るためである。

警署署の傳書場

警中へ住み替へ

警署署の傳書場が警中へ住み替へされた。これは、業務の効率化を図るためである。

金曜新
 日六廿月二十年七和昭
 日六廿月二十年七和昭
 日六廿月二十年七和昭

純國産軍式縫
 めいりんの
 サミエール手縫
 能率優秀、機械堅牢、価格廉宜
 カタログ郵送式録入左記（御照会下さい）
 四倉 駅前
 特約代理店 白川一森
 （販買外交希望の方至急御来談を乞ふ）

小内全科
 小児科 内科 外科 皮膚科
 女 醫 渡部さい子
 平町田町大通
 渡部外科
 電話二七七七

開業廣告
 醫學博士 渡部義夫
 醫學士 渡部さい子
 渡部外科
 電話二七七七

日本石油株式會社特約店
 關影商店平支店
 本店 水戸線下館驛前
 電話 六一一
 支店 次城土浦田宿
 電話 八五三

關影商店平支店
 本店 水戸線下館驛前
 電話 六一一
 支店 次城土浦田宿
 電話 八五三

松村外科醫院
 外科 皮膚科 泌尿科
 電話 七〇一

松村外科醫院
 外科 皮膚科 泌尿科
 電話 七〇一

松村外科醫院
 外科 皮膚科 泌尿科
 電話 七〇一

松村外科醫院
 外科 皮膚科 泌尿科
 電話 七〇一